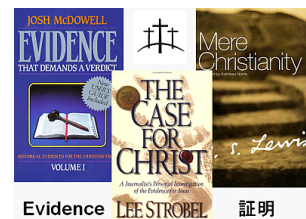
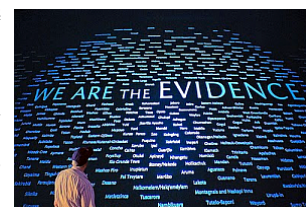


## I. 導入

おはようございます。しっかりと目を向ければ、キリスト教信仰の真理を支持する多くの根拠があります。歴史的・考古学的根拠や、預言の成就などはその一例です。ジョシュ・マクドウェル著「徹底検証キリスト教 信じる根拠はどこにあるのか」、リー・ストローベル著「ナザレのイエスは神の子か?」、C.S.ルイス著「キリスト教の精髓」は、そのような根拠を示す代表作です。これらをはじめ、OICには貸出用と販売用の本がたくさんあります。日本語では、「キリスト教の精髓」があります。



とは言え、ほとんどの人は聖書や信仰書を開いたり、福音の根拠を示す資料を読んだりしません。たいていの人には、日常生活でキリストと接する機会が唯一イエスについて知るチャンスでしょう。その人たちにとって、私たちがキリスト教を信じる根拠を提示するものです。私たちは生き方や言葉をとおして、イエスのことを知らせ、信仰の必要性を明らかにしなければなりません。



ペトロ第一3:15は、こう促します。「心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」これは、使徒ペトロの言葉です。いつでも弁明できるように備えることについて、今日の聖書箇所、パウロがすばらしい模範を見せてくれます。

先週の学びからの流れを思い出してみましょう。パウロがエルサレムの神殿にいと、ユダヤ人数人から言いがかりをつけられました。異邦人を神殿境内に連れ込んだと言うのです。そのユダヤ人たちは、パウロを神殿から引きずり出し、殺すつもりで襲いかかりました。そこにローマ帝国の千人隊長が兵士を連れてやってきて、パウロを群衆から引き離し、鎖をかけました。千人隊長は、パウロがエジプト人のならず者だと勘違いしたからです。これに対し、使徒21:39でパウロはこう答えます。「パウロは言った。『わたしは確かにユダヤ人です。キリキヤ州のれっきとした町、タルソスの市民です。どうか、この人たちに話をさせてください。』」

ではその続きを読みましょう。使徒21:40-22:22です。

## II. 聖書朗読(使徒言行録21:40-22:22, 新共同訳)

21:40 千人隊長が許可したので、パウロは階段の上に立ち、民衆を手で制した。すっかり静かになったとき、パウロはヘブライ語で話し始めた。

22:1 「兄弟であり父である皆さん、これから申し上げる弁明を聞いてください。」 22:2

パウロがヘブライ語で話すのを聞いて、人々はますます静かになった。パウロは言った。22:3 「わたしは、キリキア州のタルソスで生まれたユダヤ人です。そして、この都で育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい教育を受け、今日の皆さんと同じように、熱心に神に仕えていました。22:4 わたしはこの道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺すことさえしたのです。22:5 このことについては、大祭司も長老会全体も、わたしのために証言してくれます。実は、この人たちからダマスコにいる同志にあてた手紙までもらい、その地にいる者たちを縛り上げ、エルサレムへ連行して処罰するために出かけて行ったのです。」

22:6 「旅を続けてダマスコに近づいたときのこと、真昼ごろ、突然、天から強い光がわたしの周りを照らしました。22:7 わたしは地面に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と言う声を聞いたのです。22:8 『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである』と答えがありました。

22:9 一緒にいた人々は、その光は見たのですが、わたしに話しかけた方の声は聞きませんでした。22:10 『主よ、どうしたらよいでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる』と言われました。22:11 わたしは、その光の輝きのために目が見えなくなっていましたので、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入りました。

22:12 ダマスコにはアナニアという人がいました。律法に従って生活する信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人でした。22:13 この人がわたしのところに来て、そばに立ってこう言いました。『兄弟サウル、元どおり見えるようになりなさい。』するとそのとき、わたしはその人が見えるようになったのです。22:14 アナニアは言いました。『わたしたちの先祖の神が、あなたをお選びになった。それは、御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口からの声を聞かせるためです。22:15 あなたは、見聞きしたことについて、すべての人に対してその方の証人となる者だからです。22:16 今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい。』」

22:17 「さて、わたしはエルサレムに帰って来て、神殿で祈っていたとき、我を忘れた状態になり、22:18 主にお会いしたのです。主は言われました。『急げ。すぐエルサレムから出て行け。わたしについてあなたが証しすることを、人々が受け入れないからである。』

22:19 わたしは申しました。『主よ、わたしが会堂から会堂へと回って、あなたを信じる者を投獄したり、鞭で打ちたたいたりしていたことを、この人々は知っています。22:20 また、あなたの証人ステファノの血が流されたとき、わたしもその場においてそれに賛成し、彼を殺す者たちの上着の番もしたのです。』22:21 すると、主は言われました。『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』」22:22 パウロの話まで聞いた人々は、声を張り上げて言った。「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かして

はおけない。」

### III. 教え

群衆の反応は、パウロが望んでいたものではなかったでしょう。しかし、イエスの愛を証するなら、あらゆる反応があることを私たちも想定しておかなければなりません。この場面を思い浮かべつつ、パウロの弁明を詳しく見ていきましょう。先週もこの模型の写真をお見せしましたが、改めてお見せします。神殿とその境内はこのような様子でした。この出来事が起こった時は、たくさんの人が集まっていたでしょう。これは、神殿の庭の外側にあるアントニア要塞へと続く階段です。



パウロは、この階段の上に立って群衆のほうを向きました。人々を制する手振りをし、当時のユダヤ人の間で広く使われていたアラム語で話し始めました。パウロはこのように切り出します。(使徒22:1)「兄弟であり父である皆さん、これから申し上げる弁明を聞いてください。」パウロは、自分に襲いかかった人々に対しても、深い敬意を表し、「兄弟であり父である皆さん」と呼びかけます。彼は謙虚な姿勢で、自分たちが同胞であることを主張しました。

パウロは続いて、自己紹介をします。使徒22:3「わたしは、キリキア州のタルソスで生まれたユダヤ人です。そして、この都で育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい教育を受け、今日の皆さんと同じように、熱心に神に仕えていました。」パウロは、群衆が襲いかかってきたことについて違法かつ不正であると批判することもできました。しかしそうはせず、むしろ熱心に神に仕えていると褒めました。そのうえで、彼自身も同様に熱心であり、ガマリエルの弟子として厳しい教育を受けたと語ります。

当時、ガマリエルは名高いユダヤ教指導者でした。当時のもっともすぐれた教師であったという説もあります。その名を引用したことで、パウロの話聞く価値があると思ってもらえたでしょう。ガマリエルは最高法院の議員でもあり、有力者でした。ガマリエルがペトロをはじめとする使徒たちを擁護した一件を覚えておられるでしょうか。使徒たちがイエスを告げ知らせたことを受け、最高法院が彼らを石打ちにしようとしたときのことです。



使徒5:38-39で、ガマリエルは議員たちにこう勧めます。「5:38 そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、5:39 神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」ガマリエルの言葉は、冷静で理にかなったものでした。パウロがあえて昔の教師の名を挙げた理由のひとつがここにあるのかもしれませんが。伝承によると、ガマリエルはイエスを信じるようになったと言われています。しかし、パウロはそれに一切触れていません。

使徒22:4で、パウロは続けてこう言います。「わたしはこの道を迫害し、男女を問わず縛

り上げて獄に投じ、殺すことさえしたのです。」パウロが攻撃された直接の原因は、異邦人を神殿境内に入れたという事実無根の嫌疑でした。一方、パウロの名はクリスチャンとして広く知れ渡っており、イエスを信じる信仰に敵対する者も多くいました。パウロは、彼自身がかつてキリストを信じる信仰に敵対していたことを改めて語り、パウロを責め立てている人々と自分は何ら変わらないことを伝えようとしています。つまり、「私もあなたたちのようだった」と言っているわけです。こうしてパウロと群衆の間に共通点があることを強調した上で、彼自身の人生を180度変えるイエスとの奇跡的な出会いについて語ります。

使徒22:6-8 「22:6 「旅を続けてダマスコに近づいたときのこと、真昼ごろ、突然、天から強い光がわたしの周りを照らしました。 22:7 わたしは地面に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と言う声を聞いたのです。 22:8 『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである』と答えがありました。」後に使徒パウロとなったサウルは、クリスチャンを迫害していたことで、イエスご自身を迫害していました。これは、ある重要な真理を示します。神は私たちが深く愛しておられるので、私たちが苦しむ時、イエスご自身もともに苦しんでくださいます。私たちが悲しみや苦しみに見舞われると、主は私たちの痛みを感じ、ともに泣いてくださいます。

イザヤ書53:6はこう語ります。「わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。」サウルは道を誤っていました。イエスを信頼するのではなく、イエスを信じる人々を捕えることでイエスご自身を迫害していたのです。しかし、神のご計画と知恵により、イエスがサウルの受けるべき罰も私たちの受けるべき罰も引き受けてくださいました。

イザヤ書53:5 「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」この個所を読むと、ついイエスの苦しみに焦点を当ててしまいます。けれども、イエスの十字架上の苦しみによって得られた祝福に目を向けることもできるはずです。それは、平和と癒しです。パウロは、イエスの癒しの力と人知を超える神の平和を知っていました。そして、イスラエル人の同胞にも、同じ祝福に与ってほしいと願っていました。

パウロは天からの強い光によって目が見えなくなりました。一方、主はパウロに、生涯の使命を与えるという約束をしておられました。この使命については、アナニアという人をおして知らされます。使徒9:11で、主はアナニアのもとに来られます。「すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウルという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。」アナニアが行くと、パウロがいきさつを話しました。



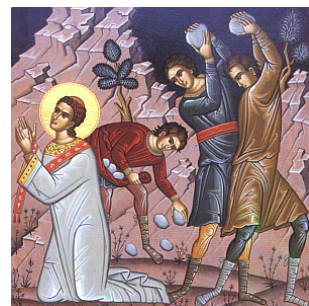
使徒22:13-15 「 22:13 この人がわたしのところに来て、そばに立ってこう言いました。『兄弟サウル、元どおり見えるようになりなさい。』



するとそのとき、わたしはその人が見えるようになったのです。22:14 アナニアは言いました。『わたしたちの先祖の神が、あなたをお選びになった。それは、御心を悟らせ、あの正しい方に会わせて、その口からの声を聞かせるためです。22:15 あなたは、見聞きしたことについて、すべての人に対してその方の証人となる者だからです。』パウロは、癒しと新たな使命を得ました。それは、イエスが生ける主であることの証人になるという使命でした。パウロは受洗して聖霊を受け、すぐさま人々にイエスの名を告げ知らせる働きを始めました。

主はパウロに何度も直接話しかけられました。ガラテヤ1:12で、自身の語る内容についてパウロはこのように主張します。「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。」これは、パウロが他のクリスチャンから何も学ばなかったという意味ではありません。パウロのメッセージの核を成す部分、つまり、信仰を通して恵みによって得る救いについては直接主から知らされたものだということでしょう。神から直接語りかけられたパウロをうらやましく思うかもしれませんが、そのような啓示を得ることに伴う重い責任を考えれば、自分たちもそうなりたいとはそうそう望まないでしょう。

激高する群衆の前で、パウロは以前エルサレムに戻った時の出来事について語ります。使徒22:17-18「22:17 「さて、わたしはエルサレムに帰って来て、神殿で祈っていたとき、我を忘れた状態になり、22:18 主にお会いしたのです。主は言われました。『急げ。すぐエルサレムから出て行け。わたしについてあなたが証しすることを、人々が受け入れないからである。』」その際、主はパウロにエルサレムを去るようにと語られました。しかし、今回は主がパウロをエルサレムに戻し、ユダヤ人の同胞たちが聞きたくないと思っていることを話すように導かれました。



パウロは、彼を責め立てている人々と自分には共通点があることを懸命に伝えようとしました。群衆に兄弟・父と呼びかけました。彼らの熱心さを褒め、パウロ自身も律法に熱心であり、ガマリエルのもとで訓練されたことを語りました。また、幻を見た話をする中で、パウロが元々クリスチャンの迫害に関与していたことを改めて話しました。最初の殉教者となったステファノが石打ちに遭った際、パウロもそこにいて賛成していたのです。

ここまで群衆は静かに聞いていました。イエスがパウロに幻の中で現れて語られたという証にも反論しませんでした。ともすれば、イエスが待ち望んだユダヤのメシアであるという可能性を考慮してもよいと思っていたかもしれません。けれども、群衆が黙って見過ごすことのできない言葉がありました。使徒22:21-22「すると、主は言われました。『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』22:22 パウロの話を経験した人々は、声を張り上げて言った。『こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしてはおけない。』」

ユダヤ人にとって「異邦人」は聞き捨てならない言葉でした。イエスがユダヤ人と異邦人両者の救い主であるという可能性を受け入れることはできませんでした。神が異邦人の間で救いを告げ知らせるためにパウロを遣わされたというのは、彼らには考えられない話です。パウロはあらゆる方法で、群衆との接点を築き、彼らの言い分を理解していることを知らせようとしまし

た。けれども、神の愛がすべての人のためにあるというメッセージについて、妥協はしませんでした。言語、民族、人種、国籍に関わらず全世界のすべての人を神が愛してくださるという真理は、福音のかなめです。パウロは、ユダヤ人の前で異邦人に対する神の愛を語らずして完全に弁明をしたとは思えなかったのです。

イエスが故郷ナザレの会堂で語った場面を覚えておられますか。ルカ4:17-19「4:17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。4:18 『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、4:19 主の恵みの年を告げるためである。』」



イエスはこの個所を読み終えると、ルカ4:21で続けてこうおっしゃいました。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」イザヤの預言がそのときその場所で成就したとイエスはおっしゃいましたが、これはご自身がメシアであることを明かしておられるのです。預言を成就することができるのはメシアだけです。このとき、会堂にいた人々がどのような反応をしたか覚えていますか。ここで間違える人が多いのですが、それは説教者も間違っていることが多いからでしょう。ここを注意深く読まなければなりません。次の個所には何と書いてあるでしょうか。

ルカ4:22「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。『この人はヨセフの子ではないか。』」人々はイエスの言葉に驚き、イエスを褒めました。イエスの言葉は「恵み深い」とも言いました。人々には、メシアであるというイエスの主張を受け入れる気持ちがあったということです。

しかしまもなく、人々は憤慨してイエスを崖から突き落とそうとしました。なぜでしょう。群衆が怒りだす直前の個所を見てみましょう。ルカ4:27「また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」人々が怒りだした原因は、異邦人であるナアマンを神が愛しておられたことをイエスが改めて言ったことでした。イエスがナザレの会堂で語った人々と、パウロがアントニア要塞の階段から語りかけた人々には共通点がありました。人々は、イエスがユダヤ人のメシアであるという可能性を否定しませんでした。一方で、神が異邦人も愛しておられるという発言には大きく反発しました。

旧約聖書を読めば、なぜユダヤ人が異邦人を嫌っていたかがわかります。エジプト人に奴隷とされ、アッシリア人やカルデア人によって捕囚の民とされました。周囲の異邦人の国々からもたびたび攻め入られました。イエスとパウロの時代には、ローマ帝国の兵士たちがイスラエルを占拠していました。ユダヤ人には友と呼べる民族はいませんでした。長年ひどい扱いを受け続ければ、憎しみが生まれるのも当然でしょう。

しかし、イエスは何と教えておられるでしょう。マタイ5:44-45「5:44 しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。5:45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」神は、すべての人を愛して祝福して下さいます。神を憎む人たちをもです。私たちがイエスのもとに行くなら、敵を赦し、敵を愛することを身につけなければなりません。神がその人たちを愛しておられるからです。

#### IV. 結び

使徒パウロになる前、サウルはクリスチャンを憎み、一生懸命迫害していました。そこにイエスが現れ、よりよい道を示してくださいました。神の愛はすべての人に向けられているという教訓をパウロはしっかり学び、これを彼自身の証に取り入れました。テモテに宛てた最初の手紙で、パウロはすべての人のために祈るようにとテモテに勧めます。そして、テモテ第一2:3-6でこう言います。「2:3 これは、わたしたちの救い主である神の御前に良いことであり、喜ばれることです。2:4 神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。2:5 神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。2:6 この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。これは定められた時になされた証しです。」イエス・キリストこそただひとりの救い主です。イエスの十字架をとおして神が与えてくださる救いは、主を信じるすべての人のものです。十字架は、神の愛を完全に表す証です。神のみこころは、すべての人が神のもとに来て救われることです。

サウルは、自分の持っていた憎しみを悔い改め、神の愛はすべての人に向けられているという事実を受け入れて、パウロとなりました。一旦このことを知り、イエスと出会って以来、パウロは愛の道をためらわず進み、後ろを振り返ることはありませんでした。この日エルサレムでパウロが語りかけた群衆は、少なくともこの時点では異邦人への愛という彼のメッセージを受け入れませんでした。きっと中には、後から悔い改めてイエスを信じた人がいたでしょう。パウロの証は無駄ではなかったと私は確信します。

私たちはどうでしょう。イエスを信じる私たちは、イエスの愛と恵みを常に語っているでしょうか。相手に伝わる方法で語っているでしょうか。イエスを信じるという決心をまだしていない人は、なにがその決心を阻んでいるのでしょうか。神がすべての人を愛しておられると知って、心が動かされないでしょうか。神が一人ひとりを愛してくださると知って、悔い改めようと思いませんか。サウルが癒された日に、アナニアが言った言葉を考えてみてください。もしかすると、あなたの救いの日は今日なのかもしれません。使徒22:16「今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい。」

祈りましょう。

#### V. 祈り